
Ruin Saga ~ 宇宙の牙 ~

霜月蒼土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ruin Saga～宇宙の牙～

【Nコード】

N2207E

【作者名】

霜月蒼士

【あらすじ】

NouAchse147年・・・惑星ツエルヴァを失った人類は、宇宙へと居住圏を拡大していた。月面都市国家アシュトレトの皇都エリシュオンを襲ったULTIM部隊・・・この襲撃事件を契機に、世界は奔流に巻き込まれていく。それは、人の運命か？業か？

Sequence 00

ツエルヴァ
惑星から巣立った人類は、宇宙へと、その居住圏を拡大させていた。

AGE 3,800年
アース・ガルド アストロサイド ルナフォーム
惑星統一政府が、宇宙都市群と月面都市群に行った

軍事的な制圧によって、

各勢力間の争いは、一気に武力衝突へと肥大していく。

AGE 3,805年
『第一次宇宙戦争』・・・

歴史に、人類最大の汚わいを残した戦争は、惑星中心核の崩壊と、“惑星”の姿を

岩塊へと変貌させ、ようやく終息を見せる。

AGE 3,808年

休戦協定から3年目のこの日、

アース・ガルド ヴェアトリス アシユトレト
惑星統一政府 宇宙都市連合 月面都市国家

三大国家の政府首脳陣が一堂に会し、母なる惑星への贖罪と、人類の新たな門出を祝し、

“新機軸”と年号を改めた。

N^{ノウイ}o^{ウイ}u^{ウイ} A^{アクツエ}ch^{ツエ}se^エ 00（デュアルゼロ）

・・・そして、147年後・・・

^{アシユトレト}月面都市国家は、衛星の各所に点在する月面都市の連邦皇政国家である。

月面都市の構造は、クレーターの表層部に宇宙港があり、地中へと都市部が広がっていた。

皇都 エリシュオン。

その表層部に5つのタワービルが、突き出している。

^{ペンタゴン}五角形で形成された、タワービル。

それぞれに、この国の主要機関があり、5つのタワービルに守護されるような形で、

中央に、他とは幾分低い皇宮がある。

「皇女・・・エターナ皇女」

エターナ＝ファル＝メルフィナを、青年が呼び止める。

「ウエルゼさん……」

ウエルゼと呼ばれた男を視認して、エターナは、傍らかたわの護衛兵を手でさえぎった。

清楚で品のある顔立ちを、整えられた銀髪が後押ししている。

「すみません……少し時間を……」

腕時計を確かめる護衛兵に、エターナが先制した。

「5分だけですよ？」

桃色のフォーマルドレスに彩られ、優雅さを振りまいたエターナが、

藍色を基調としたスーツ・ジャケットのウエルゼに駆け寄る。

「どうしたんですか？」

「こんなところまで……」

「すみません。」

「どうしても、聞いておきたかったんです」

ウエルゼの制服は、解体が予定された王室警護部のものだ。

皇宮の廊下に、皇女と解体予定の警護員……

確かに違和感のある光景だった。

「・・・警護部の解体のこと、ですか？
すみません・・・私の力不足です。
軍部を・・・抑えることが・・・」

「いえ、それは・・・
それは皇女の所為ではないです」

慌てて否定して、ウエルゼが続ける。

「軍部は、かなり以前から根回しをしていた。
仕方がないことです。

それよりも、ファーザック隊長のことで・・・」

俯^{うつむ}いていたエターナが、顔を上げる。

「なぜ、この時期に惑星調査船団^{ディープ・ストライカー}へ参加したのか・・・
承認は、皇女も出したのでしょうか？
何か聞いてませんか？」

「・・・レーヴァテイン・・・」

「えっ？」

唐突な言葉に、ウエルゼが目を丸くする。

「レーヴァテインを探せ・・・確かそう言っていました」

・・・レーヴァテイン・・・

なんだ？ なにかのコードネームか？

「・・・ウエルゼさんも、解らないんですか？」

「いえ、ちょっと、思い当たらないですが・・・」

「そうですか・・・」

エターナは、再び俯いてしまったが、そのおかげで、

先刻の護衛兵が近づいてくるのが見えた。

「皇女、この後どこへ？」

「軍部へ行きます。」

直接、彼らと対話するのが一番良いはずですから」

ウエルゼの動きで、護衛兵が来ること気がついたエターナは、

青年を正面から見上げる。

「そんな！ 危険だ！！」

「軍部は・・・」

！！ エターナの柔らかな指が、ウエルゼの唇をさえぎった。

「ここで、それ以上はダメです。」

「・・・大丈夫ですよ」

皇女・・・

ウエルゼの眉が寄せられる。

口を開こうとした護衛兵の先手を切って、エターナが振り返り、大きく頷く。

「では、ウエルゼさん。

お仕事がんばってください」

お辞儀をして、皇女は、先に歩き出した。

護衛兵は、なにか言いたそうに、ウエルゼを睨んだが、

すぐに皇女の後を追いかけていく。

01 Sequence 皇都襲撃

3ヶ月後

皇都 エリシユオン

第5層には、セントラル・パーク中央広場がある。

休日の昼下がりは、人でごった返すのだが、今日はいつもよりも増して人が多い。

「ちよつと・・・なんの警備なの？」

夕焼け色サンセットの髪を、微風になびかせ、その女が、

警備をしている警官に詰め寄った。

広場の入り口で、身分証の提示を求められたのだが・・・

「身分証の提示を・・・

ん？ 探偵・・・この時間に何の用なんだ？

君らのような職業は、明るい時間にはないじゃないのか？
何の用なんだ？ 言いたまえ！」

「守秘義務 ！！」

「待ちたまえ・・・」

「ちよつと、何の警備なの？」

職業差別する気？」

微風に吹かれるセミロングの髪を、細い指で押さえ、その女探偵が、

警備の警官に詰め寄った。

柳眉^{りゅうび}を逆立て、空色の双眸^{そうぼう}がキツと警官を睨^にんだ。

「レインさん！

こっち、こっち！」

今にも逆切れしそうな警官が、間^ま拔^はけにズツ倒^こける。

Name: レイン
スクワイレル
Age: 23
Job: 私立探偵
License: Vehicle
Hand
gun

空間に投影されたIDカードを拾い上げ、呼ばれたレイン自身も、

ちよつと驚いた様子だ。

・・・ウエルゼ「グルス、なんでここに？」

「なんだ？ 君は ！？」

横槍を入れられ、先刻よりも、さらに機嫌を悪くした警備警官が、
ウエルゼをさえぎった。

「・・・君と同じ警官だ。
ほら、ID・・・これで満足ですか？」

「ウエ・・・ウエルゼさん、でしたか・・・
失礼しました　！！
どうぞ、お通りください」

態度を急変させ、ヘコヘコする警官は、ビシッと敬礼までする。

ウエルゼが、警官に転属して1ヶ月・・・

皇宮にいたこともあるエリートとして、ウエルゼ「グルス」は有名だった。

転属して1週間で、いきなり殺人事件を解決したことも、拍車を駆け、

ウエルゼは、今やゴマすりの対象だった。

もっとも、殺人事件自体を解決したのは、レインなのだが、

ウエルゼが解決したとして公表されている。

当時の刑事部長ウイノキ「グエヴ」は、探偵の、しかも女が解決したことを隠した。

理由は、警察の威厳と保身だ。

かくして警察の威厳とやらは保たれたが、ウイノキの到着を待たず、

勝手に事件を解決したウェルゼを、修正と称して、暴行したらしい。

そんな暴君は、今や軍部のトップに上り詰め、

皇都警察はウィノキの傀儡かいらいに成り下がっていた。

「ありがと、助かったわ。

お礼に、お昼おごるわ」

「え、いや、そんなつもりじゃ」

レインの申し出に、ウェルゼは辞退しようとする。

「遠慮しない」

レインは、強引にウェルゼの腕を引っ張って、近くのオープン・カフェ

の空席に歩き出す。

「あの事件から、3週間くらい？」

「ええ、そのくらいですね」

投影された天井の青い空とは裏腹に、ウェルゼの声は、どこか暗い。

「・・・転属して、警官になったって言ってたけど、前はどこに

「？」

「それは、ちょっと・・・」

「そっか、話せないか。」

今日は、非番なの？」

「・・・まあ、似たようなですね。」

レインさんこそ、今日は、休みですか？」

「ん、今さっき、クライアントから解放されたところ・・・」

レインが答えたところで、ウェイターが注文を取りに来る。

『・・・視聴者の方々には、突然の無礼を許していただきたい』

！？ 突然響き渡った声に、その場にいた誰もが、顔を上げた。

「街頭ビジョンみたいね・・・」

レインの視線の先には、巨大な街頭ビジョンが建っていて、

その前には、人だかりができています。

「ウイノキでしょう？」

「・・・だって、よくわかったわね」

ウェルゼの位置からでは、街頭ビジョンは、ちょうど真後ろにある。

声だけで誰だかわかったようだ。

「忘れませんよ。あの声は・・・・・・・・」

??
??

02 Sequence 白神鬼

『わたしは、ウイノキィグエヴ。

皇国軍提督であります。

わたしは、国民皆様に重大かつ、重要なお知らせをするために、
今、ここに立っています。

どうか、私の話を聞いていただきたい』

街頭ビジョンに映る、ウイノキィヴェグは、政府の記者会見場の
ようだ。

ウイノキの後ろの壁に、軍部のロゴマークが見える。

四角い輪郭と、堀の深い顔立ち。

横長の鋭い目つきの中に、黒い瞳。

常に他人を威嚇^{いかく}し、見下したような印象を受ける。

『・・・皇女 エターナィファルィメルファナは、自ら行方を
くらましたのです』

ざわついていた街頭ビジョン前の人だかりが、途端に静まり返る。

『・・・これは、国家を揺るがす、重大事です。

皇女 エターナは、自らの責任を放棄し、国家を、国民を捨てたのであります』

俯いて聞いていたウエルゼの両肩が、フルフルと震えている。

あれ？ もしかして、やばい・・・

「ふざけるな ！！

皇女を誘拐したのは、貴様だ ！！！！ ウィノキ ！！！！！」

あちゃゝ・・・

止めようとしたレインより、一瞬早く、ウエルゼは、激昂^{げっくう}とともに、

声を張り上げた。

立ち上がるウエルゼを見つけた、近場の警官が、数人、こちらにやってくる。

あゝああ、面倒なことになったなあ。

レインは、やれやれといった顔で、席に腰を下ろす。

まったく・・・・・・・・

右手で頭を抱え、街頭ビジョンのウィノキを睨みつける。

！？ 瞬間、弾かれたように、レインは立ち上がった。

ウイノキが、ほんの一瞬だけ、笑ったように見えたのだ。

「ウエルゼさん。」

先ほどの言葉・・・あれはどういった意味ですか？
すみませんが、署まで同行していただく」

口を開いたのは、あのゴマすり警官だ。

警官は、他に4人いる。

「おまえもだ、女！」

ゴマすり警官は、勝ち誇ったように、言い放つ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「返事をしろ　！！　女　！！」

「・・・名前も満足に覚えられなくて、よく警官が務まるわね」

「なんだと　！？　貴様あ・・・」

顔全体に青筋を浮かばせたゴマすり警官は、腰の警棒を引き抜き、
振り上げた。

「やめないか　！！」

ガシッと、その警官の振り上げられた手首を掴み、ウエルゼが鋭

く睨む。

「抵抗したなあ、ウェルゼーグルス　！！
公務執行妨害、適用　！！　拘束しろお　！！！」

ゴマすり警官の声に呼応するように、4人の警官が、一斉に警棒を抜き放つ。

ウェルゼの左側に立つ2人の警官が、連携して襲いかかってくる。

その刹那　！！

警官2人の上半身が赤い閃光に包まれる。

！？　その場にいた全員が、その光景に、硬直した。

警官だった2人は、フラフラと力無く揺れ動き、やがて倒れこむ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

なっ、なにが起きたの？

上半身を失くした二つの死体から、焼け焦げたにおいが鼻をつく。

ビーム兵器・・・

「うわあああ　！！！」

「なんだ、こいつら　！？」

その方向を見ると、人々が何かから逃げているようだった。

ヒュン！！ と、耳に刺さるような名甲高い音とともに、上空から斜めに赤い閃光が走る。

「くっ・・・」

数秒もしないうちに、爆風が、レインとウェルゼを襲う。

その一撃を合図にするかのように、次々と、閃光が降り注ぎ、

人や建物、噴水、ベンチ・・・

あらゆるものを焼いていく。

この惨劇を生む要因を探そうと、上空を見上げるレインの動きが、ある一点で止まった。

全身が白色で、アサルト・ランサー人型機動装甲を思わせる姿。

背中には、対になった4枚のスタビライザーがあり、ふくらはぎの裏にホバーバーニア

が見える。

首の付け根まで覆われたベッドギア。

目の部分は、鼻の付け根をクロスするX字になっている。

白色の襲撃者の一体の目が、カッと一瞬、怪しく光った。

「……………そんな……あれは、AEGIS ！？」

レインの声に呼応するように、赤い閃光が視界いっぱいに広がる。

「レインさん ！！」

微動だにしないレインに、ウェルゼの叱責しっせきが飛ぶ。

グオオッ ！！

爆音と爆風が、二人を包み込んだ。

03 Sequence AEGIS

「痛つつ・・・」

身体のあちこちに走る痛み、レインの顔が歪む。

！？

レインの顔が一瞬こわばる。

「・・・レインさん・・・無事っ!!」

起き上がろうとしたウェルゼは、

右の掌に、柔らかく弾力のあるものを感じ・・・

硬直する。

・・・

しばしの沈黙。

「わっ、わわわっ!!!」

事故、事故!! 不可抗力!!」

レインに覆いかぶさっていたウェルゼは、弾かれるように飛び上った。

「ふん。」

胸、揉んでおいて、そういつと云うんだあ」

ジト眼でにらむ、レイン。

「だつ、いや、違うくて……………」

ウエルゼは、両手を前に突き出し、必死で無実(?)を訴える。

「ぶつ、あはははっ

冗談よ、冗談……………」

ついにこらえ切れなくなったレインが、吹き出す。

「……………」

からかわれたウエルゼは、なんとも云えない複雑な表情を

浮かべる。

「それにしても……………」

あの攻撃の瞬間、ウエルゼはレインを突き飛ばしたのだが、

爆発の衝撃で、二人とも吹き飛ばされてしまったらしい。

ともあれ、そのお陰で、謎の兵器群の追撃は避けられたのだった。

「裕に100mか。」

ずいぶん飛ばされたものね」

め、
レインとウエルゼが落下した場所は、幸いにして、芝生だった

二人とも、怪我らしい怪我もないようだ。

「あゝあゝ……」

悲観したレインの声に、右掌の余韻を見詰めていたウエルゼが、顔を上げる。

レインの服装は、淡い白色のパンツ・スーツだったのだが、

今は見る影もなく、あちこち擦り切れたり、汚れたりしている。

A E G I S

依然として無差別攻撃を続ける謎の兵器群。

それらを見上げ、ウエルゼは、眉を寄せていた。

あの時、レインは、確かにそう云った。

あの兵器のことを知っているのか？

アース・ガルド
ヴェアトリス
惑星統一政府や宇宙都市連合の軍部にだって、

あんな兵器はないはずだ。

どこかの極秘兵器か？

いや、そうだとでも月面都市国家を襲撃する理由はなんだ？

それに携帯可能なビーム兵器・・・

あれを実現するには、それなりの技術が必要になる。

・・・・・・・・・・・・・・・・

考えを巡らせても、答えが出る気配はない。

バツツと、突然、辺りが暗闇に包まれ、

それに反応する間もなく、弱いオレンジ色の証明に切り替わる。

「・・・非常電源・・・」

ヴイ~~~~ツ！！ ヴイ~~~~ツ！！ ヴイ~~~~ツ！！

レインの呟きにこたえるように、けたたましい警報が鳴り響く。

「あんっ もう、うるさいっ」

レインは、両耳を塞ぎ、誰に云うでもなく抗議する。

「レインさん。 とりあえずこの場を離れましょう。」

ここに居たら危険だ」

「で、どこかあてはあるの？」

走り出すウエルゼの背中に、レインの声が飛ぶ。

「・・・・・・・・・・」

「ないのね」

レインの突っ込みに、多少、走るスピードが抑えられる。

04 Sequence 激突戦域

青白い一閃が、漆黒の宇宙に走る。

皇都 エリシュオンから南へ10kmの宙域で、激しい戦闘が起こっていた。

灰色の塗装で統一された、15機の人型機動装甲。

その所属を示すマーキングは、これも統一されているのか、機体の左肩にあった。

グラディウス

短剣・・・マーキングが示すそれは、

PMC（民間軍事会社）の社名にもなっている。

人型機動装甲（A・L）は旧来から続く人型兵器の代表で、人間が装着する外骨格である。

灰色の機体が、1機、青い閃光に貫かれる。

「リヤーション！！」

墜落していくそれを追って、その声の機体が降下していく。

だが、全身が白く、対になった4枚のスタビライザーを広げた、

アサルト・ランサー

A・LそっくりのUNKNOWNが行く手を阻んだ。

な、なんて、スピードだ・・・

その瞬間、UNKNOWNが前のめりに、バランスを崩す。

『なにやつてる！ 離れろ、ヴレル！！』

通信機越しの怒鳴り声が、ヴレルを動かした。

“ 3号機 ”

バックステップをかけるA・Lの右肩に、機体番号が見える。

「10号機：Lost」

サブモニターに映されたその文字に、ヴレルは、奥歯を噛みしめ、指に掛かるトリガーに力を込めた。

60mm3連装ガトリング・ランチャーが激しく回転し、弾丸を雨のようにばらまく。

『集中攻撃！！』

4、5、6号機は、援護しろ！！ あの高い化物を近寄らせるな
あ！！！！！！』

1号機リーダーの声は、通信機から響いていたが、今のバレルには届いていない。

1号機、3号機、その他数機によるA・Lの集中砲火は、UNKNOWNを捉えて離さない。

白色の機体から、幾つかの火花が散り、その右腕が一際大きく揺れると、

閃光と轟音を響かせ、吹き飛んでいく。

バスッ！！

腹部を貫いた弾丸が、UNKNOWNの機体バランスを崩壊させた。

戦慄を振りまいた白い機体は、糸の切れた人形のように、

月面の岩壁へと吸い込まれていく。

「リャーシャン・・・」

目尻の奥から、熱いものが込み上げ、視界がにじむ。

！？

その瞬間、視界・・・いや、機体が大きく揺れた。

墜落していくUNKNOWNから放たれたワイヤーが、3号機の右足に絡みつく。

「しまっ・・・くそお！！」

『ヴレル・・・つたく』

1号機が、もがく3号機を追い抜く。

「隊長！ だめだ・・・後ろに・・・」

ヴレルの音がすべてを告げようとした、その瞬間、高速接近してきた、

別のUNKNOWNのロングソードが、1号機の胴体を切り裂いた。

「隊長おおお！！！」

『・・・ヴレ・・・ル・・・にげ・・・ろ』

通信機から、ノイズが混じった声が聞こえた。

おれの・・・おれの所為で・・・

「おおおおおおお！！！」

右足にワイヤーを絡めたまま、3号機が、その射出元へと突進していく。

大破していたUNKNOWNは成す術もなく、ヴレルの止めを喰らい、爆発を起こした。

ヴレル機を巻き込んだ煙の中から、先刻のワイヤーが飛び出し、

1号機を切り裂いたUNKNOWNに迫る。

不意を突かれた、白い機体にワイヤーが絡みつく。

束縛から逃れようと、4対のスタビライザーが唸りを上げる。

！！

散っていく煙の中から、ヴレルの3号機が、最大戦速をかけて、赤く濡れたロングソードを持つ、UNKNOWNに迫っていく。

3号機の左腕には、奪い取ったワイヤーが巻き付いていた。

3号機の加速力に、UNKNOWNのスタビライザーが、さらに加速をかける。

UNKNOWNがワイヤーの束縛から逃れた瞬間、密着した3連装ガトリング・ランチャー

が激しく回転した。

赤い閃光がモニターに広がり、機体の各所が悲鳴を上げる。

感覚から、落下していくのは分かっていたが、身体は沈黙したまままだ。

ちい……ムリし過ぎか……

『……………』

雑音に混じって、通信機が何かを訴えていたが、ヴレルには聞き取れなかった。

05 Sequence 胎動

皇都エリシユオンは、戦慄に包まれていた

人型機動装甲に酷似した白色の機体が、青白い閃光を放ち、街を焼いていく。

「・・・・・・・・くつ・・・・」

映し出される映像に、エターナ「ファル」メルフィナが顔を背けた。

「あの機体は、ULTIM・・・現在、エリシユオンを襲撃している」

男の声が、椅子に拘束されているエターナに声を掛ける。

怒気を含んだ瞳が、その男を捉えた。

「ふっ・・・端正な顔が台無しですなあ

皇女・・・・」

四角い輪郭に、横長の鋭い目つきの男の顔は、楽しむような笑みを浮かべていた。

「ウイノキ「ヴェグ」・・・

なぜ、こんなことを！？」

今すぐ止めて、こんなひどいことは！..」

今にも掴みかかりそうな顔で、エターナは必死にもがいていた。後ろ手に拘束された手首の手錠が、カシャカシャと音を立てる。足首も同じように拘束され、椅子は完全に固定されているため、全く身動きが取れない状態だ。

「……見苦しいですぞ、皇女。」

この事態を導いたのは、あなたではないですか？」

「なにを……言ってるの？」

驚愕に染まるエターナの顔に、ウイノキの右手が近寄る。

「あなたの提唱した軍縮政策が、今日の事態を招いた……………」

我々は、常に脅威にさらされている。

……………必要なのは、強大な力だ！！！！」

ウイノキの右手が、エターナの頬ほおをやさしく撫でていく。

幾いくばくかの沈黙……………」

「……しかし、民衆のバカどもは、あろうことが貴様の政策などを支持している。」

まったく愚かだ！！

支持されるべきは、わたしなのだ」

やさしく撫でていく右手とは、裏腹に、その瞳は、暗く歪んだ光が支配していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・だから証明しているのですよ、わたくしが正しいということとを」

！！

エターナの唇が、頬を擦っていたウイノキの人差し指と中指を

捉え、その口の中に含む。

ウイノキの表情に、怪訝けげんが浮かぶ。

「ぐうがああああ！！！！」

苦悶くもんの声を上げた、ウイノキは、力一杯握りしめた左の裏拳を

エターナの頬にめり込ませた。

椅子ごと吹き飛ばされそうな衝撃が、エターナを襲ったが、両足に全体重を乗せ、何とか耐えしのぐ。

乱れた銀髪が、エターナの顔を覆いおお、桃色の唇の端から、

血が流れた。

エターナの奥歯が、ゴロッとしたモノを噛砕く。

「……………うぐうう……………」

苦痛に声を漏らすウイノキは、血があふれ出る右手の2本の指を
押さえ、

怒りに満ちあふれた瞳を、エターナに向ける。

エターナの顔半分を隠した、銀髪の隙間から、鋭い眼光が

ウイノキを捉えた。

互いの怒りに満ちた視線が、宙空で激突する。

「……………貴様……………」

ギリギリと奥歯を噛みしめ、ウイノキが声を漏らす。

ペツ……………と、エターナの口から飛び出した、なにかが、床を赤
黒く汚した。

「あなたは、絶対に許されない……………」

エターナの双眸に、憎悪の暗い光が宿り始めていた。

……………

「……………勘違いなさっては困りますよ、皇女」

再び冷静さを取り戻したウイノキの声には、含み笑いさえある。

「許しなど必要ない。わたしが、すべてを決める。
わたしだけが、正しい決定を下せるのだ!!」

06 Sequence 暗雲（前編）

『・・・3週間前、皇都エリシュオンを襲撃した、あの兵器はU
LTIM・・・

それらを指揮し、国民のそのすべてを裏切っていたのは、
皇女・・・いや、最早、皇女などではない。

・・・裏切っていたのは、エターナ＝ファル＝メルファナなの
です』

襲撃事件から3週間後・・・

ようやく静けさを取り戻しつつあった皇都に、彼の^か声が響いてい
た。

全階層の街頭モニターや、ヴォイスチャンネル、ネットワーク

・・・あらゆるメディアに、例外を残すことなく、その演説が放
送されていた。

『エターナは、我々、軍部が国益のため、
軍備縮小に異を唱えていることに、遺憾^{いかん}を表明していた。
その真意は、軍部を手中に収めることにあったのです』

「・・・・・・・・・・」

エリシュオン最下層は、工場やジャンク屋などが並んだ古い街だ。

襲撃事件後、混乱した皇都政府の政治家や、主な官僚は逸早く逃げ出し、

多くの民衆は、この最下層へ逃げ延びていた。

街の中の一角に、見るからに古びれた病院がある。

この病院にも、ウイノキの演説放送が流されていた。

「でっ痛てて・・・ちよ、レインさんっ」

耳たぶを引っ張られ、顔を歪めたウエルゼが、

耳に食いつくレインの指を振り払う。

「こんなところで、また騒ぎ起こさないでよ」

ジト眼で見上げる、レイン。

「わっ、わかってますよ」

まるで、叱られた子供のように唇を尖^{とが}らせ、

ウエルゼは、再び歩き出す。

病院の玄関ロビーに、二人の姿はあった。

ウイノキの演説放送は、ロビーにある大型モニターに映し出されている。

演説を真剣に見ている者、モニターを睨みつけている者、

全く気にしていない者など、ロビーにいる人たちの表情は様々だ。

『INFORMATION』のプレートが出ている窓口で、

ウェルゼは、友人のヴレル〃オーラルの所在を確かめている。

ヴレルの入院を知ったのは、3週間ほど前。

その時は、ウェルゼ 一人で病院を訪れたのだが、今日はレインと一緒だ。

玄関の両脇に二人・・・奥の病室へ続く廊下に、二人・・・

視線を上げると、吹き抜けになっているコの字型の廊下に二人・・・

レインの視線は、病院に用事があるようには見えない、

怪しい風体の男たちを捉えていた。

紺色、灰色、黒色のスーツ姿と、見た目は様々だが、

彼らの体付きは、明らかに鍛え上げられた者たちのそれである。

そして、決定的なのが・・・

「？レインさん、どうしたんです？」

不用意に、ウエルゼは、レインの視線の先に顔を向けようとする。

「ちよっ!!」

ウエルゼの耳たぶを、今度は思いっきり引っ張る。

「ででっ!!」

勢い余って、バランスを崩しそうになったウエルゼに、

レインはそっと耳打ちした。

「2階の廊下」

口ごもったまま、視線だけを、その方向へ向ける。

!!

「そろそろ行きましょう」

「ええ」

さも、自然を装って、二人は廊下を歩き出した。

「あれは・・・軍人ですかね」

エレベータの中で、ウエルゼが呟くように言った。

「多分ね」

エレベータの中には、レインとウエルゼの二人だけだが、

監視カメラがあるため、二人は、ここでも警戒を怠ら^{おこた}なかった。

あのスーツ姿の男たちの脇の膨らみは、明らかに不自然だ。

それは、拳銃^{ハンドガン}を所持していることを物語っている。

「こんなところまで、何の用でしょうね？」

「ウエルゼくん、心当たりないの？」

「俺っすか？」

弾かれた様に、ウエルゼの顔がレインに向けられる。

「さ、着いたわよ」

戸惑うウエルゼを無視して、レインはさっさとエレベータを降りてしまう。

『208号』のプレートを確認し、ウエルゼが室内を覗き込む。

「……………ヴレル、おまえ何やってんだ？」

短く刈りあげた黒髪の青年が、その声に手を休め、顔を向けた。

深い緑色のフライト・ジャケットに、青いデニム。

一見すれば、患者には見えないが、額や腕に包帯が巻かれている。

「見て分らないか？」

ウエルゼの隣に、見慣れない女性がいることを、

気にした風でもなく、ヴレル＝オーラルは、黙々と荷造りを再開する。

「だって、おまえ、退院はまだなんじゃないのか？」

「ああ、そうだな。」

だが、院長から・・・直接言われたんじゃ、仕方ないだろ」

「言われたって、まさか！？」

「そうだよ、皆まで言わすな」

ヴレル＝オーラルは、PMC グラディウスの社員だ。

この間の、エリシュオン外周部での戦闘の生き残りならば、

当然軍部にマークされる。

持て余すほどの患者を抱える病院の院長としては、

厄介なトラブルの種は、早めに居なくなっしてほしいということか。

それで、軍人がうつっていたのか・・・？

「それより、そちらのご婦人は・・・」

「久し振りつてところかしら、ヴレル」オーラルさん」

「・・・確か、レイン・・・」

レイン「スクウレルさん、でしたよね？」

パンパンになったトラベル・バッグのジッパーを閉めて、ヴレルが手を差し出す。

ゴツゴツした男の握手に、しなやかなレインの手が答えた。

「ウエルゼが入院してたころ以来か・・・」

しかし、へえ〜」

意味深な笑みを浮かべ、ヴレルは、ウエルゼとレインを見比べる。

「余計な詮索はいい！」

それより、これからどうするんだ、ヴレル」

ウエルゼは、いぶしげな表情を浮かべて、ヴレルを肘先で小突く。

「全員動くなー!!」

低く重い怒鳴り声が、室内の空気を一変させる。

腰のガンベルトに、手を伸ばしていたレインの背中に、
固いものが当たった。

「動くな、女……」

どこかで聞いたような声に、レインは振り返る。

「あつ、ゴマすり警官」

06 Sequence 暗雲（後編）

ゴツッ！！！

「レインさん！！」

鈍い音が響いたと同時に、倒れ込むレインを、ウエルゼの太い腕が支える。

「ててええ・・・」

「ありがと、ウエルゼ」

首筋を擦りながら、レイン。

「ふんっ」

「相変わらずだな、女！」

鼻を鳴らし、レインを一瞥するゴマすり警官・・・

「貴様・・・サージル」バシキ巡査、どうつつつもりだ！？」

ウエルゼは、鋭い睨みをサージルに向ける。

！？ 紺色のスーツ姿のサージルに、ウエルゼの表情が驚愕^{きょうわく}に変わる。

「サージル」バシキ大佐だ。

間違えなくてもらおうか、ウェルゼⅡグルス」

手の中の拳銃をもてあそび、サージル大佐は、勝ち誇ったようにニヤける。

「大佐だと・・・」

「自分を誇示^{こじ}したいのはわかったから、その物騒なモノ下げてくれない？」

今にも掴みかからんばかりのウェルゼを牽制^{けんせい}してか、

レインは、その場の重い空気を、振り払うような口調だ。

いきなり殴られて、一番頭にキテそうなものなのに・・・

「ふんっ」

サージルは、片眉を少しだけ動かし、拳銃を構えるスーツの男たちに、手で合図を送る。

サージルを含めると、総勢15人・・・

ぞろぞろと、まったく・・・

「それで、サージル大佐殿は、何の御用で？」

ここには、元警官と元探偵、元PMCしか居ませんが」

それまで黙っていたヴレルが、口を開く。

「ウエルゼーグルス！」

レイン＝スクウィレル！

両名には、警備警官2名の殺害容疑が掛かっている。

貴様らには、拒否権も黙秘権も無い！！」

必要以上に大声で、まるで二人に殺害容疑が掛かっていることに、

狂喜きょうきしたように、サージルは言い放った。

「殺人！？

ちよつと待てよ。警備警官つて、あの時の・・・」

ウエルゼの反論は、途中で止まってしまふ。

再び、無数の拳銃が構えられたからだ。

「貴様らには、質問する権利も無い。

我々が、犯人だと断定したのだ。それ以上は、必要ない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すでにまともな話し合いにすらならなかった。

この場で、下手な反論や抵抗をしたら、それこそ事態が悪化する。

ここには人質候補に困らないし、

あの事件で、少なからず軍部に反感を持つ人間が、多く集まることで衝突すれば、

それを口実に鎮圧行動だとか称して、一気に軍が雪崩れ込んでくる。

そうならば……………

「ちよつと、なにしてるんですか？」

スーツの男たちの向こう側で、看護師の声が上がった。

あらら……人質候補が、飛び込んできちゃったよ。

「やつ、ちょ……やめてください」

スーツ男の一人に押さえつけられ、看護師が、サージルの前に連れて来られる。

「さあ、大人しく武器を捨ててもらおうか」

「わかったわ」

サージルが、看護師のこめかみに銃口を向けるのと同時に、

レインはガンベルトを外し、床に落とした。

それを合図に、ウエルゼも、懷から拳銃を取り出し、床に落とす。

ヴレルは、両手を後頭部に乗せて、反抗の意思がないことを示している。

「……命拾いしたな、お嬢ちゃん」

看護師の背中を乱暴に押しつけ、サージルは、周りの男たちに顎で合図を送った。

「大丈夫？」

レインは、転びかけた看護師を起たせる。

「はい・・・あの、ごめんなさい。
わたしの所為で」

「そんなことないわ。
あなたは、あなたができることをやっただけでしょう？」

俯いて看護師の顔がレインを捉えたとき、レインの手首には手錠が掛けられていた。

サージルは、役目は終わったとばかりに、さつさと病室を出ていってしまう。

レインとウエルゼは、スーツ男に両脇を支えられ、病院の廊下を歩いていく。

病院の関係者や、患者、見舞いに来ていた人々は、

まるで腫物はれものを触るような目で、連行される2人を見送っていた。

「・・・・・・・・」

看護師ミリスは、そんな周囲の人々に、憤りいきどおを感じずにはいられ

な
か
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2207e/>

Ruin Saga ~ 宇宙の牙 ~

2010年10月9日18時19分発行